

## 歴文3月・月例研修会報告 山の辺の道

杉本 登

3月の例会は天理から柳本まで山の辺の道を北から南へ歩く行程である。

日時：平成31年3月20日（水）10時 JR天理駅前集合で、参加者は24名であった。



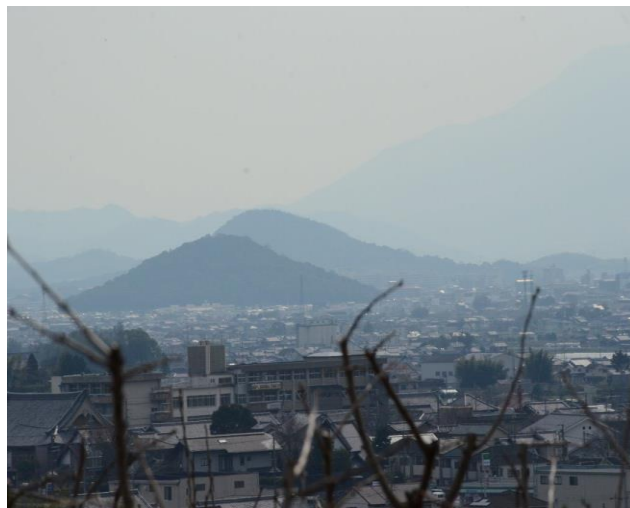
行程：JR天理駅前（歌碑）→天理市役所前（歌碑）→石上神宮外苑（歌碑）→石上神宮鳥居前（歌碑）→石上神宮→内山永久寺跡→天理観光農園（昼食）→夜都伎神社→萱生環濠集落（歌碑）→手白香皇女衾田陵→衾路（歌碑）→天理トレイルセンター→黒塚古墳展示館→JR柳本駅

お水取りは終わったが、三寒四温で日替わりの不安定な天気が続いていた、今日はすばらしいお天気でハイキングには絶好である。天理駅前の万葉歌碑の前で本日の行程と柿本人麻呂の紹介を行った。人麻呂は万葉集に長歌19首、短歌75首が載せられており万葉集を代表する歌人の一人であるが、その生涯は謎が多く詳しいことは分かっていない。平安時代になって神格化され「歌聖」と呼ばれたり三十六歌仙の一人に選ばれている。天理市内の万葉歌碑は立派な歌碑が建てられ、全て万葉仮名で刻まれている。天理市の「万葉集」にかける思いがうかがわれる歌碑である。

「石上 布留の高橋 高々に 妹が待つらむ 夜ぞふけにける」巻12-2997

石上の布留の高橋の上でかわいいあの娘がつま先立ちで私を待っている ああ夜もふけてしまったなあの意である。いかにも万葉の恋人の様子がし

のばれてほほ笑ましい。布留の高橋に行ってみようとなり、古川さんと中井さんで先行して高橋に行ったが、古代をしのぶべくもない鉄の橋だということで高橋は止めて石上神宮へ向かった。ここは日本で一二を争う古い神社で、古代は物部氏の拠点でもあり大王家の武器庫であった。神宮に参拝し山の辺の道を南へたどる。しばらく行くと内山永久寺跡に出る。ここに芭蕉の句碑が立っている。



「うち山や とどまらずの 花ざかり」説明板に芭蕉の青年時代宗房のころの句とある。とどまは外部の人の意で、内山には地元の人しか知らないが桜が美しく咲いていると詠んでいる。内山永久寺跡の説明板を見ると大きい立派なお寺であったことが分かる。明治の初めに廃仏毀釈運動が吹き荒れ壊されてしまったという、惜しいことである。夜都伎神社を過ぎ、手白香皇女衾田陵へ向かう途中に菜の花が咲いていた。黄色い花が一面に咲いており、山の辺の道に良く似合う。

この辺りは大和国中が一望でき素晴らしい眺望である。遠くに大和三山、金剛・葛城の山々、二上山もよく見える。手白香皇女衾田陵に参拝し、最後の歌碑に向かう。人麻呂が隠し妻を引手の山（竜王山）に葬り涙も枯れはてるまで嘆き悲しんで詠んだと伝わる歌である。「衾道を 引手の山に 妹を置いて 山路を行けば 生けりともなし」巻2-212。歴文の皆さんも万葉集は朗唱するものと理解していただき、大きな声で歌うことができた、幹事としてはうれしい限りである。